

昭和文学会 秋季大会

*対面を主とするハイフレックス方式（対面・オンライン併用方式）

対面会場：法政大学 市ヶ谷キャンパス 富士見ゲート棟G201教室

オンライン：「Zoomウェビナー」による中継。リモート参加には事前登録が必要です。

詳細は別紙を参照ください。

*日時 十一月二日（土）一三時～一七時

特集 文学における〈発明〉表象

開会の辞

法政大学文学部日本文学科教授

中丸 宣明

【基調講演】

今日の文学における「私小説」の全面化（？）をめぐって

佐々木 敦

【研究発表】

誘惑する発明家

——海野十三の探偵／科学／軍事小説——

加藤 夢三

発明と禁止

——戦後日本のロボット表象——

山田 夏樹

司会 久村 亮介・山路 敦史

【全体討議】

ディスカッサント 小松 史生子

司会 嶋田 直哉

閉会の辞

代表幹事 佐藤 秀明

【講演者紹介】

佐々木 敦 (ささき・あつし)

批評家。作家。早稲田大学文化構想学部非常勤講師。立教大学文学部兼任講師。映画美学校言語表現コース「ことばの学校」主任講師。文学ムック「ことばと」編集長。芸術文化の複数の分野にかかわる。著書多数。小説にかんする著作として、『絶対安全文芸批評』(INFASパブリケーションズ、二〇〇八年)、『ニッポンの文学』(講談社現代新書、二〇一六年)、『例外小説論——「事件」としての小説』(朝日新聞出版、二〇一六年)、『新しい小説のために』(講談社、二〇一七年)、『私は小説である』(幻戯書房、二〇一九年)、『これは小説ではない』(新潮社、二〇二〇年)、『それを小説と呼ぶ』(講談社、二〇二〇年)、『絶体絶命文芸時評』(書肆侃侃房、二〇二〇年)などがある。小説作品に『半睡』(書肆侃侃房、二〇二一年)。

【講演要旨】

「私小説」は、日本文学における、一種の「発明」である。だがそれは他の多くの文学用語と同じく、厳密な定義のされないまま、極く曖昧に使用されてきた。その曖昧さに倣いとりあえずそれを「作家が、私」をモデルとした小説」と呼ぶとして、二〇一〇年代の半ば頃から現在にかけて、この古くも耐久性の高い「発明品」には或る変質が起きているように思われる。それは広義の「読者」が「小説」作品の向こう側に「作者」その人を意識的無意識的に見出そうとしてしまうこと、すなわち小説の語り手や主人公、登場人物を「これを書いた、私」がモデルであると考えてしまう傾向の強化である。なぜそうなっているのか？ それの意味するものは何か？ そして、これからどうなるのか？ 本講演ではこのような「私小説(性)の全面化」について、最近の芥川賞の傾向と、講演者による小説作品「半睡」を主な対象として考えてみたい。

【発表要旨】

誘惑する発明家 —— 海野十三の探偵／科学／軍事小説 ——

加藤 夢三 (かとう・ゆめぞう)

日本SFの始祖として名を挙げられる海野十三は、いわゆる「探偵小説」の書き手として自身のキャリアを確立させたが、一九三五年前後を境として「科学小説」という新興の文芸ジャンルを創設することに意欲的な姿勢を見せていく。そこには、分かりやすく珍妙な科学的装置の「発明」を作中に描くことで、高尚な「謎解き」とは異なる講談のような興味をもたらしそうという独自の方略が認められる。海野は、それを「探偵小説」の「低級化」と呼びあらわし、むしろ「発明」の新奇さによって読み手の興味・関心を惹起する記述営為を積極的に肯定していたが、そのような作意のあり方は、戦時下において「発明」が政治的有用性と結びつくなかで「軍事小説」の物語文法へと絡め取られていくことにもなる。本発表では、右に述べたような一連の転遷を概観しつつ、海野の文業と「発明」というモチーフの関連を通時的に解き明かすことで、その表現活動の振幅を再考してみたい。(お茶の水女子大学)

発明と禁止 —— 戦後日本のロボット表象 ——

山田 夏樹 (やまだ・なつき)

マルクス『資本論』では、産業革命以前の機械の発明が、仕事の喪失を危惧する労働者により抑圧されたことが示され、「発明者」が「絞殺または溺殺」された事例を記す資料も引用される。また、デヴィッド・グレーバー『官僚制のユートピア』では、監視、規律などの性格の濃い情報テクノロジーの推進と引き換えに、物語られてきたロケット、ロボットといった夢が潰え、ディストピアしか描けなくなっている現在の状況が指摘される。

本発表では、こうした発明にまつわる禁止や抑圧されるイメージを、特にロボットの表象を軸に考察することで、有用性という概念について問い直す。同時に、役に立つ／立たない、といった枠組み自体が物語をいかに駆動してきたのかも捉え返す。具体的には、アトム(手塚治虫)、鉄人(横山光輝)を通じて二〇世紀の総括を試みる浦沢直樹作品への注目を端緒に、藤子不二雄、藤子・F・不二雄作品、その他SFなどを検証する。加えて、現在の消費文化への連なりについても確認する。(昭和女子大学)

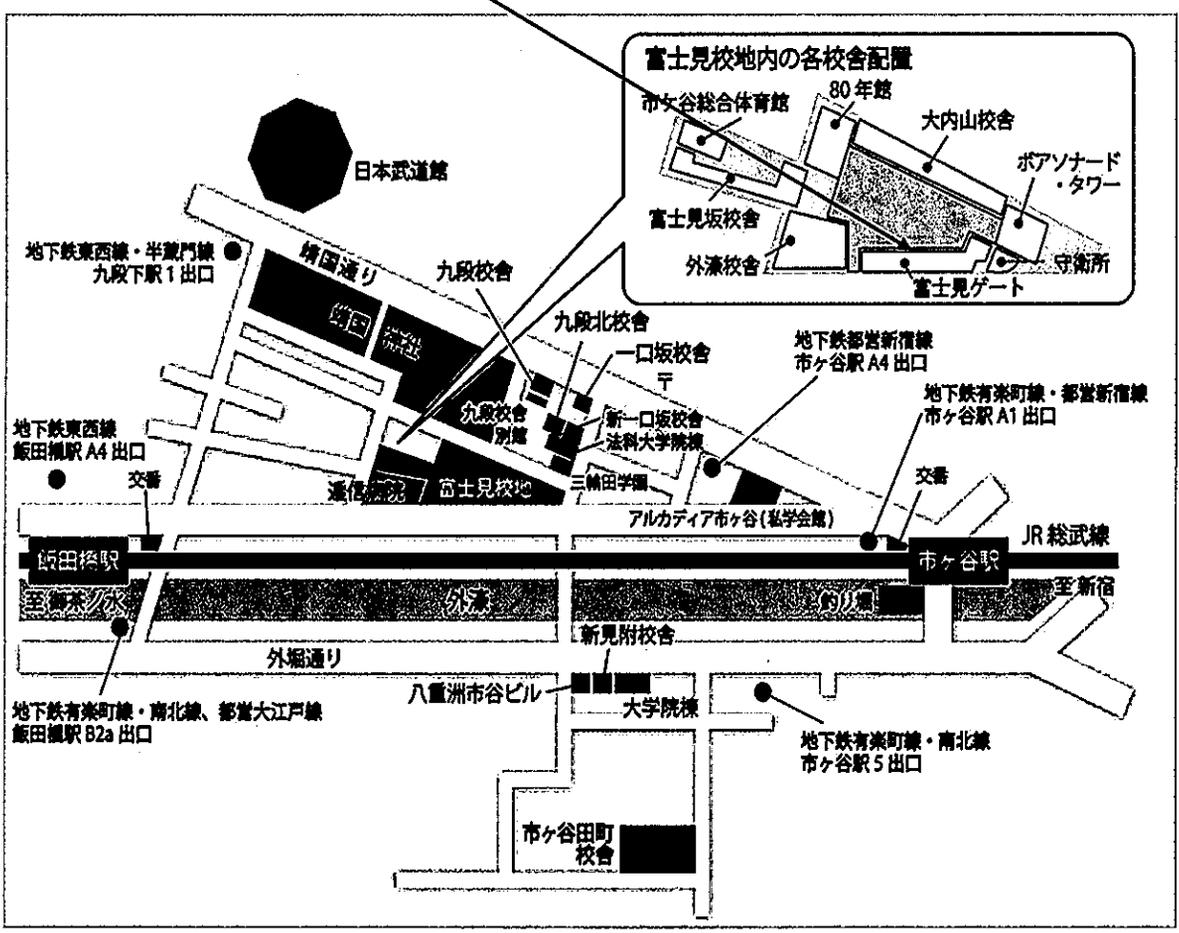
【ディスカッション紹介】

小松 史生子 (こまつ・しよご)

金城学院大学文学部日本語日本文学文化学専攻教授。日本探偵小説史を軸に、大衆文学・大衆文化を比較文学・民俗学・人文地理学の視座を取り入れながら研究。主な著書に『探偵小説のペルソナ 奇想と異常心理の言語態』(双文社出版、二〇一五年)、共編著に『怪異』とナショナルリズム』(青弓社、二〇二二年)、論文に「ミステリと南洋表象——非歴史化される「秘境」——」(『金城日本語日本文学』第九八号、二〇二二年三月)など。

法政大学市ヶ谷キャンパス アクセスマップ

会場：富士見ゲート棟 2階 G201 教室



- 〒102-8160 東京都千代田区富士見二-17-1
- 市ヶ谷駅より、徒歩10分 (JR…総武線、東京メトロ…有楽町線・南北線、都営地下鉄…新宿線)
- 飯田橋駅より、徒歩10分 (JR…総武線、東京メトロ…東西線・有楽町線・南北線、都営地下鉄…大江戸線)